

# クリノリン・ドレスの縫製技術

——1860年代の実物資料調査より——

塚 本 和 子\*

## A Study of Sewing Techniques of the Crinoline Dress

——Examining Three Sample Dresses of the 1860s——

Kazuko Tsukamoto

**要 旨** 19世紀の婦人服、クリノリン・ドレスのパターン・縫製法について調査研究を行った。卒業論文で時代衣装の複製をする学生に充実した指導をするため、資料作成をすることを目的とした。調査した資料は1860年代のワンピースドレスで、デイドレスとして着用された資料3点である。当時のドレスはデザインを決定する際には身頃は3面構成、袖は2枚袖、スカートはプリーツを入れ、トレーンを曳いているなどを条件としていた。素材は3点とも布幅は60cm前後で、使用量は約10mであった。ドレスの裏側に用いる裏打ち布は3点ともに身頃にはつけられていたが、スカート2点にはつけられていなかった。身頃のみに裏打ち布を使用したのは、汗などの影響や動作することにより縫い目に力がかかるためであると思われる。縫製はすべて手縫いであった。身頃の各縫い目は細かい返し縫いで、しっかりと縫合されていた。スカートは布地に負担がかからない程度のやや粗めの並み縫いであった。実物資料を調査することにより、充実した資料を作成することが出来た。

**キーワード** クリノリン・ドレス 実物資料 1860年代

### I は じ め に

本大学では卒業論文で時代衣装、特に婦人服の複製を希望する学生がいる。製作するに当たり、実物の構成について把握することが重要であり、文献調査および実物資料の調査をすることが必要であるが、実際に実物資料を手にとつて、研究及び教育指導を行うことは容易なことではない。

本学では博物館が所蔵している資料を研究のために観覧できるが、貴重な資料であるため、学生の指導に利用することには限界がある。

また、構成に関する文献については

- ・ Janet Arnold: Patterns of Fashion 2 1860—1900, London, Macmillan Limited, (1966)
- ・ Norah Waugh: The Cut of Women's Clothes 1660-1930, London, Faber and Faber Limited (1968)
- ・ Nancy Bradfield: Costume in Detail 1730-1930, London, Harrap Limited (1975)

等があげられる。

これらの文献はドレスの解説、パターン、構成図などがわかりやすく丁寧に掲載されている。

しかし学生を指導するには文献のみでは難しく、より充実した指導をするために資料を作成することを目的とした。

\* 本学助教授 被服造形学

## Ⅱ 1860年代のドレス

クリノリン・ドレスは1854年頃から1867年頃の間に流行したドレスで、大きく広げられたスカートが特徴である。1860年代はスカートが最も大きく広がったものである。

クリノリン・ドレスはボディスとスカートの二部形式が中心であるが、1860年代に入ると、ワンピースの一部形式のものが出現した。ドレスの特徴は身頃の背丈が短く、ウエスト位置が高くなり、スカートは前面が平たく、ふくらみが後ろに張り出し、曳き裾が長かった。主な装飾はレース、ブレード、フリンジ、プリーツなどである。また、1860年代末はさらに曳き裾が長くなり、全体に細身のシルエットとなり、バッスル・スタイルへと変化していった。

## Ⅲ 実物資料の調査方法

調査した資料は、文化学園服飾博物館所蔵のワンピースドレス3点である。3点とも日中に着用するデイドレスである。

調査内容は次の通りである。

### ①デザインの特徴

資料を観察し、各部位のディテールのデザインや装飾などドレスの特徴を把握する。

### ②パターン採取

布目の方向などを手がかりに各部位を細部採寸し、採取する。

### ③素材

素材の布地名、布地幅、布地の厚さについて調べる。副素材の使用についても記録する。

### ④各部位の縫製法

縫い代、折り代の始末。その他各部位の縫製方法について、詳細に観察し、記録する。

## Ⅳ 調査結果

### 1. デザイン

#### 1) 実物資料A (図1)

博物館の資料によると、1865年頃のアメ리카のものである。ブルーの無地のワンピースドレスである。

身頃は後ろ身頃のパネルライン、前身頃の3本のダーツでウエストの細さを強調したシルエットとなっている。前明き釦止めで、釦は同色の糸で編まれた、くるみ釦がつけられている。衿なしで、袖は2枚袖である。

スカートは前面のふくらみが少なく、後ろに大きく張り出したシルエットである。前後中心輪裁ちで10枚接ぎである。裾はトレーンを曳いている。スカートのプリーツは脇にとられた1本のプリーツと、後ろ中心のカートリッジプリーツである。左斜め前明きで、右斜め前の縫い目にシームポケットがある。スカート全体にリフォームによる多くの接ぎ目がある。

装飾は、袖口とスカートの裾にプリーテッドフリルの装飾が施されている。

#### 2) 実物資料B (図2)

1865年頃のイギリスのものである。緋の草花の織り模様のワンピースドレスである。

前身頃は2本のダーツがあり、前明きで、釦止めである。釦はガラス製であった。後ろ身頃はパネルラインである。衿なしで、衿ぐりにレースの付け衿がつけられている。袖は2枚袖のタイトスリーブとパゴダスリーブの二重構造である。パゴダスリーブは中側に必ずアンダースリーブがつけられた二重構造になっているのが特徴である。

スカートの前後中心に縫い目があり、8枚接ぎである。後ろ裾はトレーンを曳いている。スカートの明きは前中心にあり、後ろ中心縫い目はコーデットシームである。プリーツは斜め後ろの2本のみである。右斜め前の縫い目にシームポケットがある。右ウエストには時計ポケットがある。

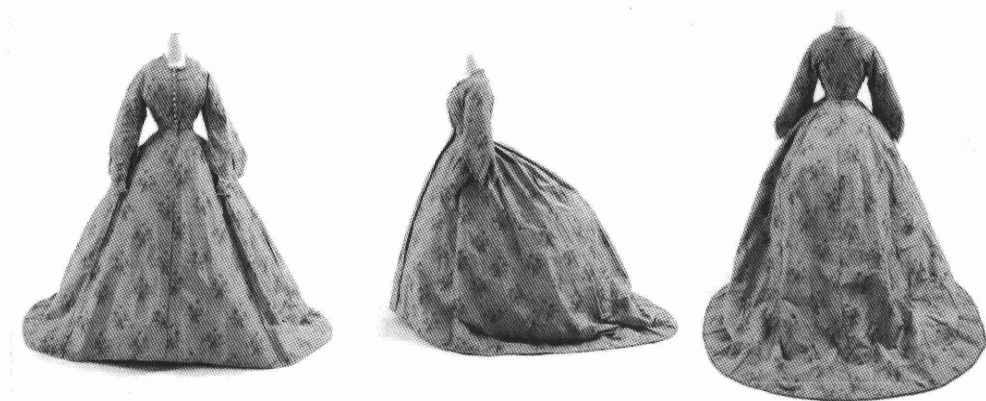


前面

側面

後面

図1 実物資料A（文化学園博物館所蔵）

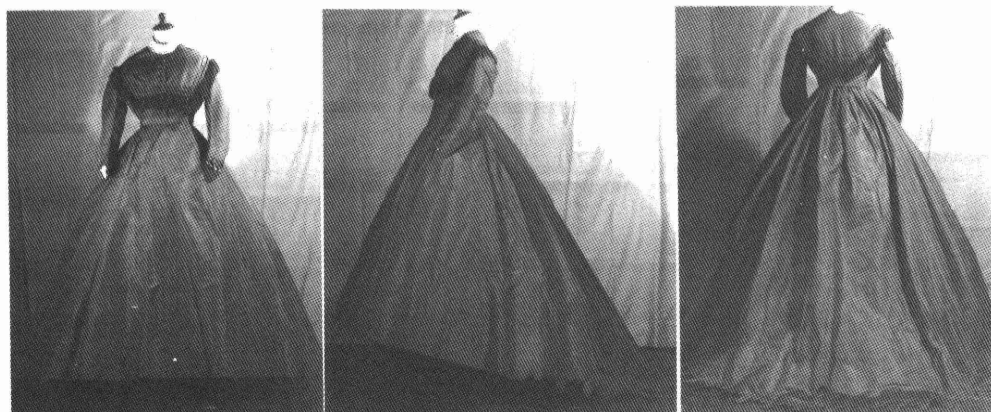


前面

側面

後面

図2 実物資料B（文化学園博物館所蔵）



前面

側面

後面

図3 実物資料C（文化学園博物館所蔵）

デイドレスのスカートの明きが前中心にある例は文献などでは比較的少なく、多くは左斜め前に明きがある場合が多い。この資料のように身頃からスカートにかけて、前中心明きのドレスは1870年代のバスル・スタイルのドレスで多く見られる。

装飾は衿ぐりにつけられていた付け衿、内側のタイトスリーブと外側のパゴダスリーブの袖口にレースがつけられている。ガラス製の釦も装飾の一部であるといえる。

### 3) 実物資料C (図3)

1860年頃のもので、グリーンが無地のワンピースドレスである。

身頃は後ろ身頃のパネルライン、前身頃の2本のウエストダーツ、前明き釦止めである。釦はくるみ釦である。衿なしで、袖はドロップショルダーの2枚袖である。

スカートは前後中心輪裁ちで10枚接ぎ、トレーンを曳いている。プリーツは後ろ中心のカートリッジプリーツだけである。左斜め前明きで、左ウエストに時計ポケットがあり、右斜め前の縫い目にシームポケットがある。

装飾は前胸と袖山、後ろ身頃に続けてドレスと同色のブレードがつけられている。また、袖口にはブレードとスカラップがつけられている。スカートの裾には大小組み合わせたスカラップがあり、スカラップの端はパイブドエッジで始末してある。

## 2. パターン (図4, 図5, 図6)

実物資料のパターンは資料の布目方向などを手がかりに各部位を細部採寸し作成した。

この時代のパターンの特徴については、これまでの研究<sup>1)</sup>などを通して報告した内容と同様の特徴で、以下の通りである。

- ①背幅は狭く、胸幅が広い。
- ②後ろ衿ぐり寸法が小さく、前衿ぐりが大きい。
- ③肩線は前身頃より後ろ身頃の傾斜が強い。
- ④袖は2枚袖で、外袖と内袖の袖幅にほとんど差がなく、肘ぐせが強い。

⑤スカートは長方形と台形のパターンで構成されている。

さらに、3点のパターンについての共通の特徴をまとめると以下の通りである。

- ①身頃のパーツは、前身頃、後ろ身頃、後ろ脇の3面構成である。それぞれのパーツの形はほぼ同じ形で、特に肩線、アームホールは類似していた。脇線およびアームホールの形状から、バスト寸法とウエスト寸法を脇縫い目で着用者の体型に合わせていたと考えられる。
- ②前身頃のウエストダーツは実物資料Aが3本、実物資料B, Cは2本である。3点ともにリフォームされたものであるため、ダーツの本数は最初に作られた時の本数である。
- ③スカートは実物資料AとCは10枚接ぎ、Bは8枚接ぎである。プリーツについては実物資料Aが1本のソフトプリーツとカートリッジプリーツ、Bは2本のソフトプリーツ、Cはカートリッジプリーツのみである。

## 3. 素材

実物資料A, B, Cともにスカートの各パーツにより、布幅いっぱい使用されている部分があり、資料の布地幅を調べることが出来た。

### 1) 実物資料A

主素材は絹のタフタで、ブルーの無地である。布地幅は64cm。使用量は1040cmである。

裏打ち布の身頃はスレーキ、袖は白の艶のある綿 (glazed cotton, 艶のある平織ではりのある綿)、スカートは一重仕立てであるが、裾には裾芯と見返しがつけられている。見返しは全体が同一の素材ではなく、スカートの前面部分は白の艶のある綿、後面部分はブルーの艶のある綿である。

### 2) 実物資料B

絹のタフタで、紺の草花の織り模様である。布地幅は57cmで、使用量は990cmである。

裏打ち布は身頃と中側の袖に白の艶のある綿、中側の袖口の見返しと外側のパゴダスリーブの

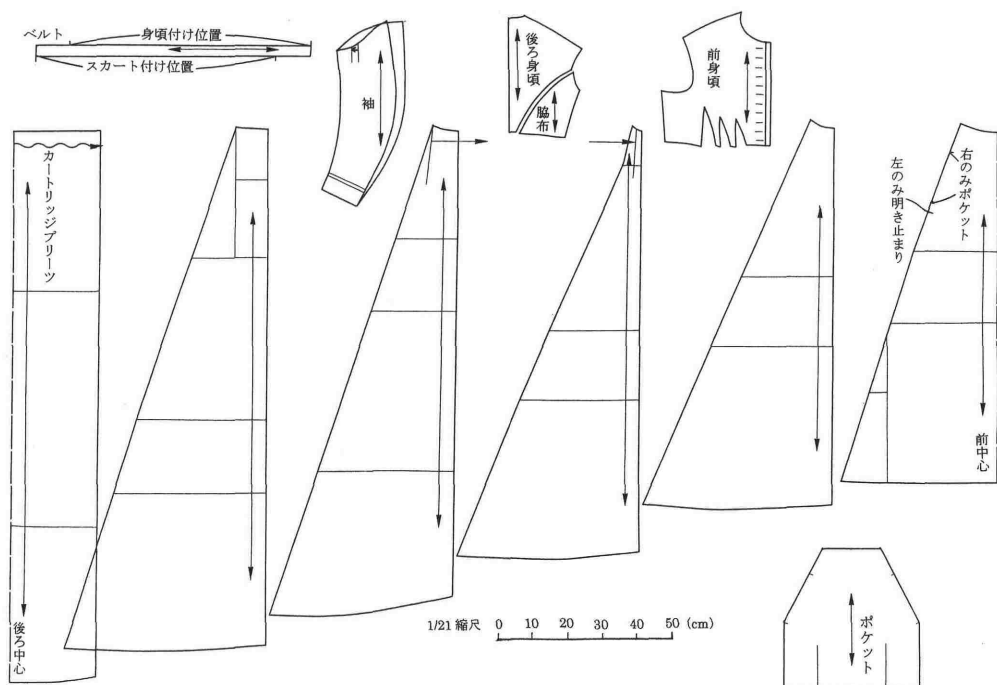


図4 実物資料Aのパターン

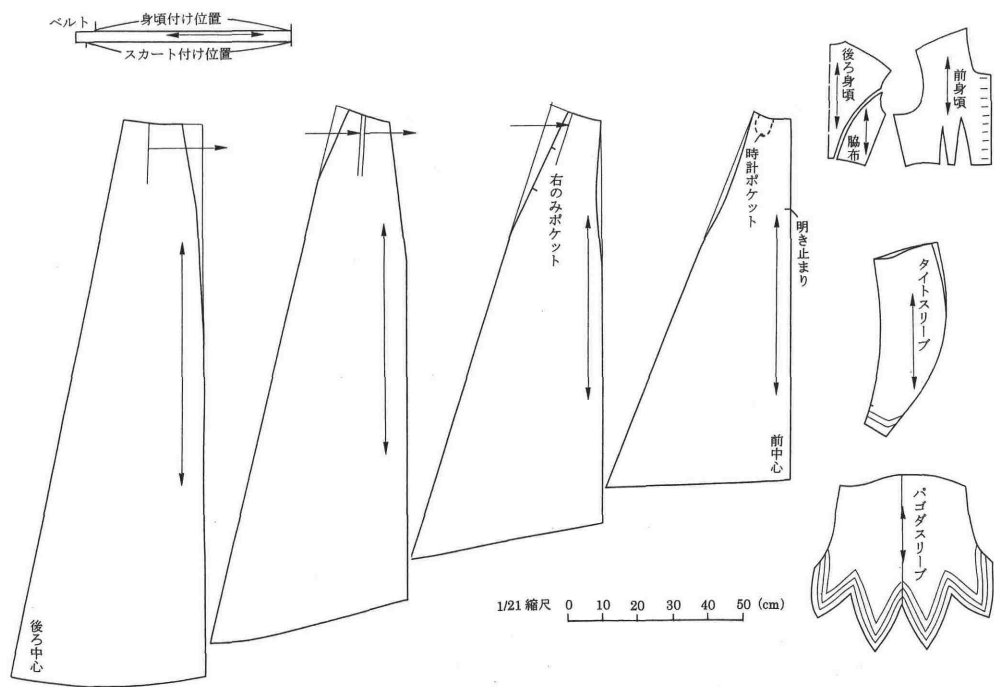


図5 実物資料Bのパターン

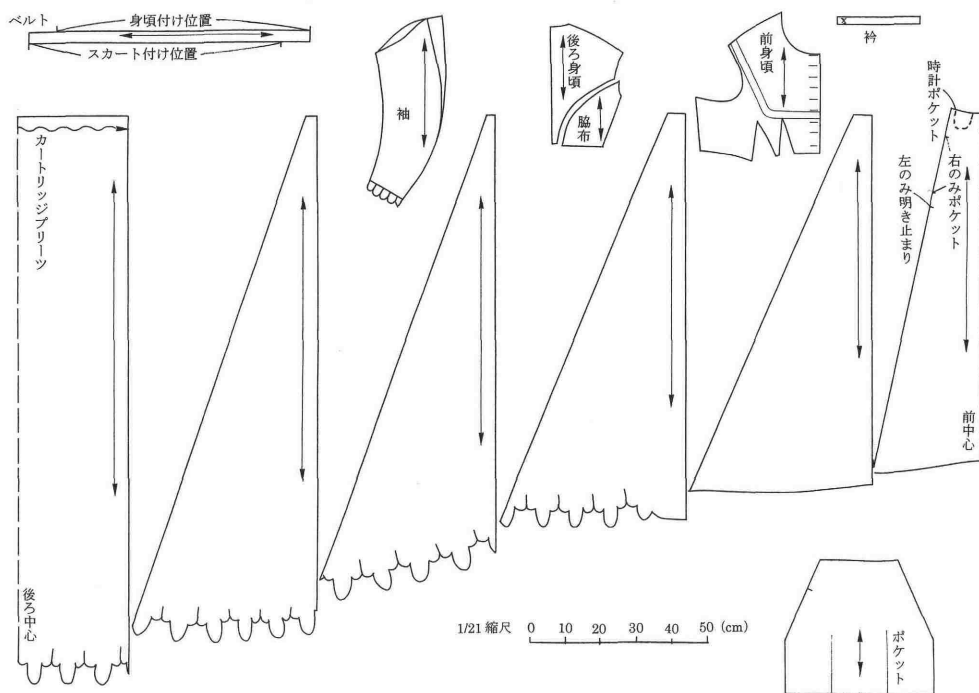


図6 実物資料Cのパターン

裏面には絹の羽二重が使用されている。スカートの裏打ち布は綿ローン、裾の見返し部分はホースヘアを織り込んだ張りのある素材である。

### 3) 実物資料C

絹のタフタで、グリーンが無地である。布地幅は62cm、使用量は1030cmである。

裏打ち布は身頃とタイトスリーブは白の艶のある綿である。スカートは一重仕立てであるが、スカートの裾にはグリーンタフタと麻がつけられている。

## 4. 縫製 (表1, 表2-1, 2, 3)

資料ごとに、各部位の縫製の特徴を整理し、3点を比較した。3点の資料はいずれも総手縫いであった。

### 1) 実物資料A (図7)

身頃に裏打ち布がついていたが、スカートにはなく、一重仕立てであった。

### ①身頃

#### ・ダーツ

前身頃に3本あり、ダーツの中央に切り込みをいれ割り、2本のダーツには綿テープを並縫いで止めつけ、ダーツと綿テープの間にボーンが入れてある。

#### ・後ろパネルライン

略伏せ縫いである。脇布の縫い代を出来上がりに折り、後ろ身頃の出来上がり位置にのせ、表側から細かく返し縫いがしてある。ミシン縫いのように針目がそろい、細かく縫われている。縫い代の幅は4cmで、裁ち切りである。

#### ・脇縫い

返し縫いで縫合し、割り、縫い代の始末は裁ち目かがりである。割った縫い代の上に綿テープをのせ、並縫いで止めつけ、縫い代と綿テープの間にボーンが入れてある。縫い代の幅は1.5~2.5cmである。

#### ・肩縫い

縫い目は返し縫いをし、縫い代を裁ち目かがり

りし、前側に片返ししてある。縫い代の幅は1.2cmである。

- ・衿ぐり

0.1cmの太さのコードを使用したコーデットエッジである。

- ・前端

左身頃の上前は4cm幅の続け立ち見返しで、片止めのボタンホールの穴かがりがしてある。下前の右身頃の裏面に3cm幅の綿テープをのせ、並縫いとまつり縫いでとめつける。前端裏面に1cm幅の綿テープを縫いとめ、中に14cmの長さのボーンを入れる。ボタンは共布でくるんだ上に、同色の糸で編んでくるまれたくすみボタンである。ボタンには糸足がつけられていない。

- ②袖

- ・袖縫い目

2枚袖である。縫い代は外袖側へ片返しで、表布の外袖と内袖、裏布の内袖の3枚を一緒に並縫いし、裏布の外袖を出来上がりに折りのせ、糸が目立たないようにまつりとめてある。縫い代の幅は0.7cmである。

- ・袖口

裏布を折りのせ、細かくまつりとめてある。縫い代は0.5cmである。

- ・袖付け

細かく返し縫いする。縫い代の幅は0.5cmで、裁ち目かがりである。

- ③スカート

- ・各縫い目

身頃の縫合より針目はやや粗めの並縫いで、後ろ側へ片返しされている。縫い代の幅は0.7cmで、裁ち切りである。

- ・明きの始末

左斜め前縫い目位置である。上側は別布の見返し、下側には別布の持ち出しである。

- ・ポケット

右斜め前縫い目位置にシームポケットがある。袋布は艶のある白の綿で、袋布の周囲の始末は折り伏せ縫いである。

- ・ベルトつけ

表裏のベルト布で身頃を挟みつけ、スカート

のウエストを出来上がりに折り、ウエストベルトに細かく巻き縫いで、縫いとめる。

- ・裾の始末

裾に別布の裾芯をとめつけ、表布を三つ折りし、まつり縫いで始末されている。

- ④装飾

袖口とスカートの裾に共布のプリーテッドフリルがつけられている。

- ⑤リフォーム

縫い目跡の状態から、二度以上である。一度はサイズ変更のため、資料のデザインに作り直されたときは、別の着用者のために作られたものと思われる。スカートにはたくさんの接ぎがある。パターン採取の時、接ぎ位置も合わせて採取した。結果、1850年代に多く見られた形のヴォランスカートであることがわかった。

- 2) 実物資料B (図8)

身頃、スカートともに裏打ち布がついていた。この資料にはボーンが使用されていない。ドレスにボーンがつけられ始めたのは1850年代のクリノリン・スタイルになってからで、多くのドレスにボーンが使用されていた。これまで実物資料、文献などで調査したものはすべてドレスにボーンがつけられていた。しかし、バッスル・ドレスではボーンをつけていない場合があった。クリノリン・ドレスでは資料Bのようにボーンがつけられていないものは数少ないケースである。資料Bは構造、縫製の面から見て、バッスル・ドレスへ変化していく末期の時期のドレスであると判断した。

- ①身頃

- ・ダーツ

前身頃に2本あり、脇側へ片返しし、0.8cmの幅に整理し、裁ち目かがりである。

- ・後ろパネルライン

略伏せ縫いである。縫い代の幅は3.5cmである。裏打ち布にはパネルラインの切り替え線がなく、後ろ身頃と脇布は1枚である。

- ・脇縫い

返し縫いで縫合し、後ろ側へ片返しし、縫い代の始末は裁ち目かがりである。縫い代の幅は

1.5cmである。

- ・肩縫い

縫い目は返し縫いをし、縫い代の幅は2cmで、裁ち目かがりし、後ろ側に片返ししてある。

- ・衿ぐり

0.1cmの太さのコードを使用したコーデットエッジである。

- ・前端

左身頃の上前は2cm幅の別布の見返しで、前端にはパイピングがつけられ、片止めの穴かがりがしてある。下前の右身頃の裏面に2cm幅の別布の見返しがついてある。ボタンはさいころ形の直方体の形をして、ガラス製である。ボタンのつけ方は裏側に0.2cmの太さのタコ糸が渡してあり、ボタンつけ位置に小さい穴をあけ、ボタンの足を差し込み、タコ糸をボタンの足に通してとめている。

## ②袖

- ・袖縫い目

外側のパゴダスリーブと中側のタイトスリーブで構成されている袖の各縫い目については、外側のパゴダスリーブは1枚袖で、コーデットシームである。

中側のタイトスリーブは2枚袖で、縫い代は外袖側へ片返ししてあり、外側の縫い目はコーデットシームで、内側の縫い目は返し縫いである。縫い代は裁ち目かがりで、縫い代の幅は0.7cmである。

- ・袖口

中側のタイトスリーブ、外側のパゴダスリーブ両者とも0.1cmのコーデットエッジである。

- ・袖付け

コーデットシームで、細かく返し縫いをし、縫い代の幅は0.5cmで、裁ち目かがりである。

## ③スカート

- ・各縫い目

並縫いで、後ろ側へ片返しされている。縫い代の幅は0.7cmで、裁ち目かがりである。

- ・明きの始末

左斜め前縫い目位置である。上側と下側ともに続け裁ちの見返しである。

- ・ポケット

右斜め前縫い目位置にシームポケットがある。袋布の縫い代は袋縫いである。

- ・時計ポケット

スカートとウエストベルトの縫い目位置につけられ、ポケット口4cmのシームポケットである。

- ・ベルトつけ

表裏のベルト布で身頃を挟みつけ、スカートのウエストを出来上がりに折り、ウエストベルトに細かく巻き縫いする。

- ・裾の始末

裾に別布をとめつけ、ベルベトリボンで挟み縫いしている。

## ④装飾

衿ぐり、タイトスリーブとパゴダスリーブの袖口に白のレースがつけられている。

## ⑤リフォーム

一度は作り直している。身頃の脇の縫い目に接ぎがある。これはサイズ直しをしたものである。また、スカートの各縫い目の縫い直しを確認した。スカートのシルエットを変えたものである。

## 3) 実物資料C (図9)

身頃に裏打ち布がついていたが、スカートにはなく、一重仕立てであった。

### ①身頃

- ・ダーツ

前身頃に2本あり、片返しし、縫い代は0.8cmの幅に整理し、裁ち目かがりで始末している。ダーツの中にボーンが入れている。

- ・後ろパネルライン

略伏せ縫いである。縫い代の幅は1cmで、縫い代は千鳥がけで身頃にとめつけている。

- ・脇縫い

返し縫いをし、縫い代は割り、裁ち目かがりである。縫い代の上に綿テープをのせ、並縫いで止めつけ、縫い代と綿テープの間にボーンが入れている。縫い代の幅は1.2cmである

- ・肩縫い

返し縫いをし、縫い代の幅は1.2cmで、裁ち目かがりし、前側に片返しする。



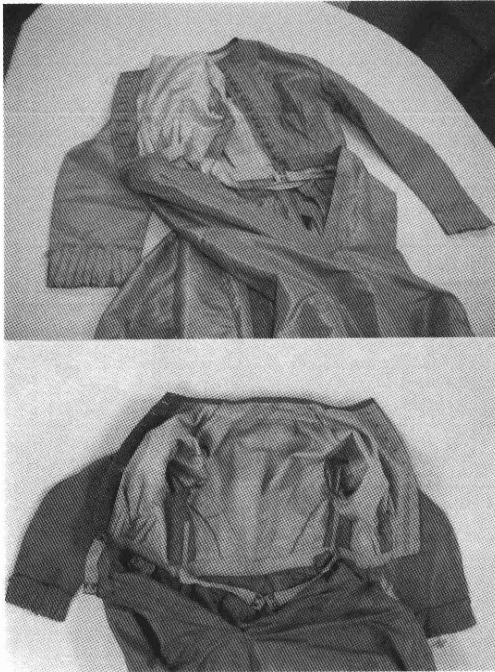


図7 実物資料Aの裏面(文化学園博物館所蔵)



図8 実物資料Bの裏面(文化学園博物館所蔵)

- ・ 衿ぐり

身頃を衿で挟み付けしている。

- ・ 前端

上前の左身頃と下前の右身頃の裏面に3cm幅の綿テープを縫いとめ、上前は片止めの穴が開き、下前は共布のくるみボタンがつけられている。長さ13.5cmのボーンをウエストより上に1cm幅の綿テープで縫いとめた中に入れてある。

- ②袖

- ・ 袖縫い目

2枚袖の2本の縫い目は前後の表布の袖と前側の裏布3枚を並縫いし、後ろ側の裏布を折りのせ、糸が目立たないようにしてまつ。縫い代は1cm幅で、後ろ側へ片返している。

- ・ 袖口

コーデットエッジで、スカラップになっている。13.5cm幅の白の羽二重で見返し仕立てである。

- ・ 袖付け

細かく返し縫いをして、縫い代を0.5cm幅にし、裁ち目かがりする。



図9 実物資料Cの裏面(文化学園博物館所蔵)

表 1 各部位の縫製法

		実物資料A	実物資料B	実物資料C
身頃	前ダーツ	3本、割る、裁ち切り	脇側へ片返し 裁ち目かがり	前側は前中心側、脇側は 脇へ片返し、裁ち目かがり
	後ろパネル ライン	略伏せ縫い脇側へ片返し 裁ち切り	略伏せ縫い 脇側へ片返し	略伏せ縫い、 脇側へ片返し、千鳥がけ
	脇	割る、裁ち目かがり	後ろ側へ片返し 裁ち目かがり	割る、裁ち目かがり
	肩	前側へ片返し 裁ち目かがり	後ろ側へ片返し 裁ち目かがり	前側へ片返し 裁ち目かがり
	衿ぐり 衿りつけ	コーデットエッジ	コーデットエッジ	衿で身頃を挟みづけ
	明きと 留め具	前明き、穴かがり くるみ釦	前明き、穴かがり ガラス製釦	前明き、穴かがり くるみ釦
	ボーン	ダーツ、脇縫い目、右身 頃前端に綿テープをとめ つけた中		前ダーツの中、脇縫い代 と右前身頃前端に綿テー プをつけた中
	ウエストベルト つけ	表裏ベルトで身頃を挟み づけ、スカートは巻き縫 いで縫いとめる	表裏ベルトで身頃を挟み づけ、スカートは巻き縫 いで縫いとめる	表裏ベルトで身頃を挟み づけ、スカートは巻き縫 いで縫いとめる
袖	袖下縫い	表布と裏布前側の袖3枚 を縫い後ろ側袖をのせく ける、後ろ側へ片返し	裁ち目かがり 後ろへ片返し	表布と裏布前側の袖3枚 を縫い後ろ側袖をのせく ける、後ろ側へ片返し
	袖山縫い	表布と裏布前側の袖3枚 を縫い後ろ側袖をのせく ける、後ろ側へ片返し	裁ち目かがり 後ろへ片返し	表布と裏布前側の袖3枚 を縫い後ろ側袖をのせく ける、後ろ側へ片返し
	袖口の始末	縫い代を折り上げ裏布を のせくける	コーデットエッジ 共布の見返し仕立て	コーデットエッジ、白の 羽二重の見返し仕立て
	袖付け	半返し縫い 裁ち目かがり	コーデットシーム、半返 し縫い、裁ち目かがり	半返し縫い 裁ち目かがり
スカート	各縫い目	並縫い、裁ち切り 後ろ側へ片返し	並縫い、裁ち目かがり 後ろ側へ片返し	並縫い、裁ち切り 後ろ側へ片返し
	明きの始末	見返し明き、別布の持ち 出し	前中心位置で続け裁ち見 返し明き	見返し明き、別布の持ち 出し
	ポケット	シームポケット 袋布の周囲は包み縫い	シームポケット、袋の周 囲は袋縫い	シームポケット 袋布の周囲は裁ち目かがり
	時計 ポケット		シームポケット、袋布の 周囲は裁ち目かがり	シームポケット 袋布の周囲は袋縫い
	裾の始末	別布見返しをつけ、表布 を三つ折りしてまつ	別布見返しをつけ、まつ り、ベルベトリボンの 縁とりする	別布見返しをつけてまつ り、スカラップ部分は コーデットエッジ
全体の縫製法		総手縫い	総手縫い	総手縫い
	ボディス	身頃は裏打ち仕立て 袖は裏つき	裏打ち仕立て	身頃は裏打ち仕立て 袖は裏つき
	スカート	一重仕立て	裏打ち仕立て	一重仕立て

表 2-1 各部位の縫製図（身頃の裏面）

	実物資料 A	実物資料 B	実物資料 C
前ダーツ			
後ろパネルライン			
脇			
肩			
衿ぐり・衿りつけ			
前端			

表 2-2 各部位の縫製図（袖の裏面）

	実物資料A	実物資料B	実物資料C
袖縫い目			
袖口の始末			
袖付け			

### ③スカート

#### ・各縫い目

並縫いで、後ろ側へ片返しされている。縫い代の幅は.7cmで、裁ち切りである。

#### ・明きの始末

左斜め前縫い目位置である。上側は別布の見返し、下側には別布の持ち出しである。

#### ・ポケット

右斜め前縫い目位置にシームポケットがある。袋布の周囲は細かく並縫いし、縫い代を裁ち目かがりで始末されている。

#### ・時計ポケット

スカートとウエストベルトの縫い目位置につけられたポケット口4.5cmのシームポケットである。袋布は共布である。

#### ・ベルトつけ

表裏のベルト布で身頃を挟みつけ、スカートのウエストを出来上がりに折り、ウエストベルトに巻き縫いする。

#### ・裾の始末

裾はスカラップになっており、コーデットエッジで始末している。麻の裾芯をとめつけ、グリーン系のタフタで見返し仕立てになっている。

### ④装飾

胸元から袖つけ、後ろ身頃にかけて表布より濃いグリーン系のフリンジとセルフブレードがつけられている。袖口にはスカラップとセルフブレード、スカート裾には大小組み合わせたスカラップである。

### ⑤リフォーム

一度作り直している。これはサイズ直しを中心としたものと考えられる。また、身頃のバストから脇にかけてつけられていた綿入りのパットがはずされたあとがあった。

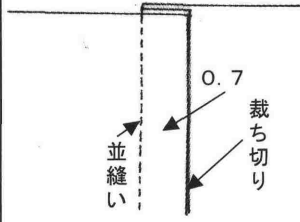
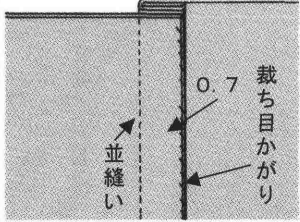
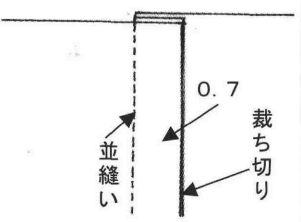
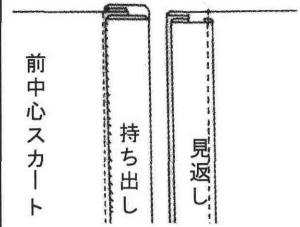
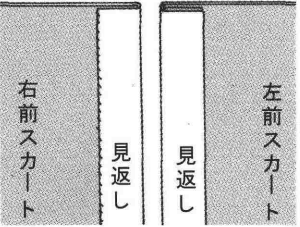
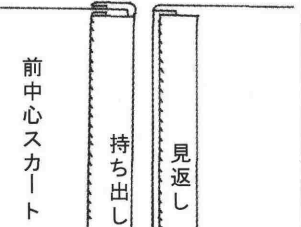
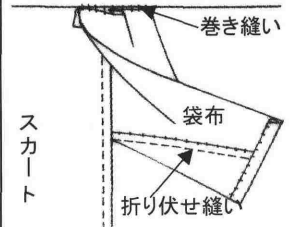
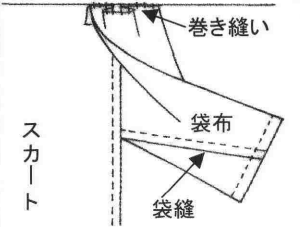
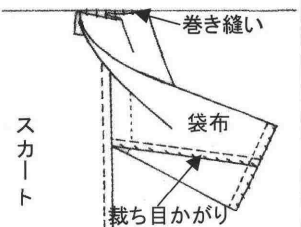
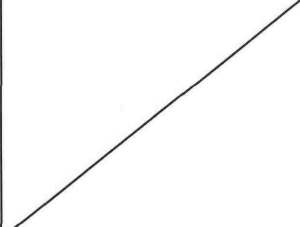
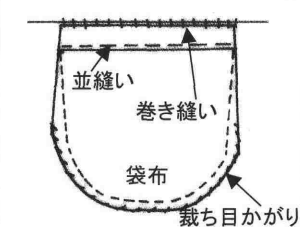
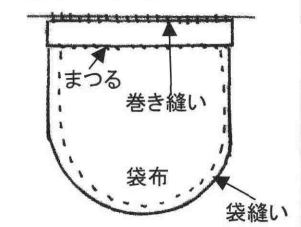
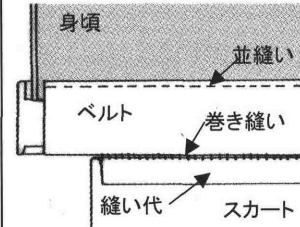
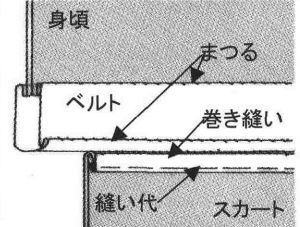
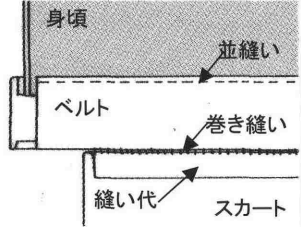
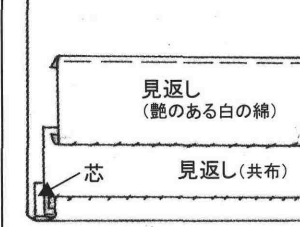
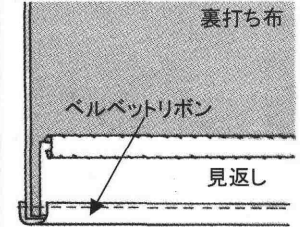
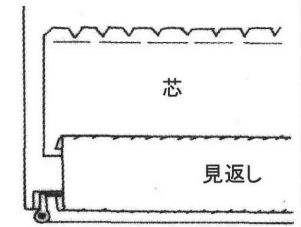
#### 4) 実物資料の比較

3点の共通した縫製方法は以下の通りである。

#### ①身頃

・後ろパネルラインは略伏せ縫いである。

表 2-3 各部位の縫製図（スカートの裏面）

	実物資料A	実物資料B	実物資料C
各縫い目			
明きの始末			
ポケット			
時計ポケット			
ベルトつけ			
裾の始末			



- ・肩の縫い代は片返しである。
- ・明きは前明きで釦止めである。
- ・袖付けは0.5cm幅に縫い代を整理し、裁ち目か  
がりをする。

#### ②スカート

- ・各縫い目はすべて後ろへ片返しする。
- ・右斜め前の縫い目にシームポケットがある。
- ・スカートのウエストとベルト布を巻き縫いで  
とめる。

以上が、3点の共通した縫製であるが、縫製  
について記載されている文献でも同様であった  
ことから、ドレスを作成するときには共通した  
認識の下で、製作されたものと考えられる。

3点の相違点については以下のことが確認さ  
れた。

- ・身頃のダーツの始末は割るまたは片返す。
- ・縫い代の始末は割るまたは片返す。片返す場  
合は片返す方向が異なっていた。
- ・身頃の明きの始末は続き見返しまたは別布を  
使用した見返しである。
- ・スカートの縫い代は裁ち切りまたは裁ち目か  
がりの始末である。
- ・裾の始末は3点共に異なる始末であった。

## V ま と め

実物資料3点の調査をまとめると以下の通り  
であった。

#### ①デザイン

調査対象資料3点の共通点は

- ・上半身の身頃が前、後ろ、脇の3面構成であ  
る。
- ・袖は2枚袖である。
- ・スカートはソフトプリーツとカートリッジプ  
リーツがあり、トレーンを曳いている。
- ・ポケットはスカートの右斜め前の縫い目を利用  
し、つけられている。
- ・装飾の主なものにはブレード、フリンジ、レー  
スである。

以上の点は文献資料からも同様の傾向が見ら  
れた。従って1860年代のデイドレスのデザイン

を考える時の条件であったといえる。

#### ②パターン

前、後ろ、脇の3つのパーツで構成されてい  
た身頃の各パーツの形は類似していた。特に肩  
線、アームホールの形は類似していた。脇縫い  
目で着用者のバストとウエストの寸法を合わせ  
ていたものと考えられる。スカートは8枚また  
は10枚接ぎ。長方形と台形のパターンで構成さ  
れていた。パターンはほぼ同じ形であった。

#### ③素材

布幅は約60cm前後で、使用量は約10mである。  
裏打ち布は3点ともに身頃にはつけられていた  
が、2点のスカートはつけられていなかった。身  
頃は汗などの影響や動作をすることにより各縫  
い目に力がかかるため、必ずつけられていたもの  
と推察した。

#### ④縫製

総手縫いであったが、身頃の各縫い目はミシ  
ンで縫われたように細かく、しっかりと縫合さ  
れていたが、スカートの縫い合わせは0.2〜  
0.3cmの針目で並み縫いであった。着用したとき  
に力がかかる部位は丁寧にしっかりと縫合し、力  
のかからない部位はやや粗めにし、布地に負担  
がかからないような縫製であった。

袖ぐりからバストにかけてパットがついてい  
た後があった。パットを入れることにより、胸  
部を強調させ、ウエストをより細く見せる工夫  
であると推察した。

#### ⑤装飾

調査対象がデイドレスであったため、一着に  
つけられていた種類は1〜3種類であった。主  
にブレード、フリンジ、レース、プリーツで、  
装飾されている位置は、ボディスでは衿ぐり周  
辺・胸元・袖付け・袖口、スカートは各縫い目  
または前面左右斜め前の縫い目位置・裾などで  
ある。

#### ⑥リフォーム

3点ともにサイズ変更の直しが確認された。  
布地を裁断するときにはサイズを直すことを前提  
として縫い代を多めに付けたものと考えられる。

以上、実物資料より、ドレスを製作する上でデザイン、パターン、縫製について共通した点を確認した。また、縫い代の始末、裏打ちの入れ方など、縫製者の判断によって縫製された部位があることがわかった。

実物資料の調査により、パターンを採取し、各部位の縫製についてまとめ、今回の目的である資料作成することが出来た。

本研究の調査にご協力下さった文化学園服飾博物館学芸室室長道明三保子教授、並びに学芸員小宮真喜子氏に心から感謝いたします。

#### 実 物 資 料

- A 文化学園服飾博物館所蔵：ワンピースドレス、1865年頃
- B 同 ワンピースドレス、1865年頃
- C 同 ワンピースドレス、1860年頃

#### 注

- 1) ・小松正子・塚本和子：クリノリン・ドレスのパターンと縫製法について、文化女子大学研究紀要第19集（1988）
- ・塚本和子・小松正子：クリノリン・ドレスの複

製とその技術的考察、文化女子大学研究紀要第15集（1984）

#### 参 考 文 献

- [1] Janet Arnold: Patterns of Fashion 2 1860-1900, London, Macmillan Limited, (1966)
- [2] Norah Waugh: The Cut of Women's Clothes 1660-1930, London, Faber and Faber Limited (1968)
- [3] Nancy Bradfield: Costume in Detail 1730-1930, London, Harrap Limited (1975)
- [4] Margot Hamilton Hill & Peter A. Bucknell: The Evolution of Fashion, Pattern and cut from 1066 to 1930
- [5] フランソワ・ブーシェ著石山彰監修：西洋服装史、文化出版局、(1971)
- [6] 丹野郁：西洋服飾発達史 現代編、光生館（1965年）
- [7] ルドミラ・キバロバー、オルガ・ヘルベノバー、ミレナ・ラバロバー共著、丹野郁・原田二郎・池田孝江共訳、絵で見る服飾4000年史 服飾百科事典、岩崎美術社（1971）
- [8] 丹野郁・原田二郎：西洋服飾史、衣生活研究会（1975）
- [9] 丹野郁：西洋服飾史 図説編、東京堂出版（2003）